

## 第1回（仮称）都市のランドデザイン有識者委員会 議事概要 まとめ

### 【有識者委員会の検討について】

・第2、3回の有識者プレゼンテーションでいただく課題や将来の見通しと、区が目指すまちづくりのテーマ設定や視点をまとめて、第4回以降の議論で有識者委員会の提案の骨格として整理し、具体的な提案をまとめる。

### 【練馬区の現状と課題について】

・公共施設の更新は今後の大きな行政課題であり、区は今年3月に「公共施設等総合管理計画」を策定した。これにより、施設の統合・再編、複合化等を含め、今後の施設管理の方向性を定め、適正化を図る。

・練馬区の外国人人口の状況としては、日本で就業、定住している中国、インド出身者の人口が増えている状況である。何らかのきっかけで、ダイバーシティのような形の打ち出しがあっても良いのではないかと思われる。

・練馬城址公園については、東京都が防災、みどりをコンセプトとした公園整備を平成32年までに事業着手する方針であり、「としまえん」のような遊園地としての存続は難しいと認識している。区では、昨年から設置している連絡会で、都へ要望を伝えていくことを考えている。

・木造密集エリア内にある練馬城址公園が、防災公園としての機能を発揮するためには、避難経路となる道路ネットワークの整備が必要である。公園西側に接する都市計画道路補助133号線が、都の整備方針の中で、今後10年間に整備に着手する路線に位置付けられ、今後、公園と一緒に整備が進む見込である。

・最後のアウトプットイメージの範囲について、基本的に「都市計画マスタープラン」において、概ね10年先を見据えているため、そこで示している土地利用のベースを大きく逸脱することは考えづらいが、より良いものがあれば、別の視点から提案・検討いただきたい。

### 【今後の検討に向けて】

・人口という指標は、総人口や高齢者率、待機児童など、自治体間で比較される傾向にある。検討の前提として、周辺区市と比較した練馬区の強み・弱みを正確にとらえた上で政策を作るべきである。2040年代の東京のランドデザインで示されている練馬区を含む「都市環境共生域」の内容については、あまり

明確になっていないところもある。逆に練馬から提案することが、周りに対する強みになる。

・練馬区には大河川が存在せず、石神井川と白子川という中小の河川が存在している状況もあり、これまでは治水対策に重点が置かれ、水に親しむという考え方がやや不足している。豊かな暮らしという点では水も一つの大きなテーマであり、河川の整備・工夫についても計画にいれるべきである。

・外国人人口の増加や練馬区の現状で重要なテーマは、国の状況よりも練馬区の資料を出してもらった方が議論しやすい。また、同じ資料であっても、人口や高齢者率など、どの視点から資料を読み解くかということが重要である。

・生産緑地の2020年問題について、このまま生産緑地の指定解除が進むと、その後10、15年後の練馬のまちの変化に相当大きなインパクトを与えると思われる。「都市計画マスタープラン」では、この部分についてあまり検討しきれていないので、具体的に検討しても良いと考える。

・「何のために今回のグランドデザインを作るのか」ということが一番重要である。例えば、練馬区の生活アビリティを高めるなど、大きな目標が無いと、みどりの活用や魅力ある拠点づくり、インフラ整備などについて、区民に対して説得力を持って説明することが難しくなる。

・社会福祉の観点からみると、地域包括ケアについての練馬区の状況はまだ厳しいものと認識している。将来的には、高齢者もできるだけ社会参加を続け、社会保障の担い手になってもらう社会をつくっていかないとならない。そのためにも、様々な相談・支援をワンストップで対応できる窓口を、駅や道路整備と併せて計画的に配置し、それがまちづくりの拠点・支えあいの拠点になっていくというような視点が必要である。

・有識者委員会の役割は2つある。現在、区が事業を進めていく中で想定している将来像について、専門的見地から違う視点やアイデアについてコメントすること。30年後の日本、世界はどうなっていて、その中で練馬区をどう館考えていくかと問題提起をする役割。有識者委員会の前半では、30年後の未来像というものを各々の専門分野から漠然と示し、後半で責任ある意見を議論するのが良い。